新聞で国民主義をつらぬいた人　陸（くが）　羯南（かつなん）

陸羯南＝くがかつなんとよむ。とても、めずらしい名まえである。

陸は弘前からでた人だが、現在、弘前市に陸（くが）の姓を名のる人はすんでない。（一九九九年一二月九日、弘前市民課に問い合わせたところによる）

羯南（かつなん）というのは号で、本名は実という。幼いころは、己之太郎といった。

羯南は、一八八九年（明治二十二）に国民主義の立場から、東京で「日本」という新聞をつくった人である。いまは書くことや話すことなど、言論は自由の時代だが、そのころは、自由にものをかくのはむずかしかった。（とくに、政治のやり方を批判するなど）

が、当時の政府のやりかたや、政治に対して、するどい批判をくわえたために、新聞「日本」は、つよい弾圧をうけた。そのため、しばしば新聞の発行をさしとめられたが、それにくっすることなく、さいごまで羯南は信条をつらぬいた。

このように羯南は、新聞人としての面目をつらぬいた熱血あふれる人だが、反面、知人や後輩たちのめんどうをみる、心のあたたかい、抱よう力のある人でもあった。

こうした羯南の人柄をしたって、郷土の弘前からも新聞「日本」に参加した人はすくなくない。

たとえば、のちに朝鮮や台湾などで新聞の指導者となった赤石定蔵（あかいしていぞう）や、花田節（はなだせつ）という人たちもそうだし、劇作家、小説家として有名な、佐藤紅緑（とうこうろく）もその一人である。

また明治期の俳句、短歌で名をなした正岡子規（まさおかしき）もまた、羯南にたすけられて世に出た人だった。

羯南は一八五七年（安政四）、弘前市在府町にすむ、中田謙斉（なかたけんさい）という津軽藩のさむらいのいえに生れた。

が、あとになって、親類にあたる陸の家をおこしたために、姓は中田から、陸に変わったのである。

ともかく羯南の生活には、さまざまな出来ごとがあり、文字どおり、波らんにとんだ生涯をおくっている。

一八七一年（明治四）彼は十五歳のとき五十石町にあった、工藤他山（たざん）という漢学者の塾で、漢学（漢文や、漢籍についての学問）をべんきょうした。ここで、べんきょうしたことが、あとで新聞人となり、ものを書く文筆活動をするうえで大きく役だった。

羯南は、雪ぶかい津軽の人らしく、口べたなほうだった。しかし、彼の書いた文はすばらしく、格調のたかい名文ばかりだが、その基礎は、工藤塾で身につけたといっても過言ではない。

ところで、羯南という号のいわれだが、工藤塾で学んでいたときにつくった、漢詩（漢文でかいた詩）からとったものである。

すなわち、その詩の中に、次のような一節がある。

＜風涛自靺羯南来＞

靺羯（まつかつ）というのは、いまの中国北東部で、そのころ蛮勇をふるっていた民族の名まえである。この蛮勇民族靺羯がすんでいる大陸から、はげしい風や波が、わが国におしよせてくるという、外国からの圧力をかんじて、羯南は詩にかいたのだろう。

この詩が、先生の目にとまって大いにほめられ、こうして彼は、号を羯南としたといわれる。ちょうど、時代は明治維新にあたり、外国文化の影響をうけて、日本の国は大きくかわりつつあるときだった。

そんな時代のうごきを、東北のはての弘前にすむ十五歳の少年羯南が、すでにかんじとっていたことにおどろかされる。

羯南は、靺羯の南にあたる――という意味にとれるが、われこそは南にあたる日本男子だ、と自負してつけた号にちがいない。

羯南という、号をとおしてみても、彼が国のためにつくす国士でもあった一面を、うかがい知ることができる。

羯南が、工藤塾で学んだのは、わずか一年たらずだった。

一八七二年（明治五）に開校した、東奥義塾に移ったからである。

羯南が東奥義塾に入ったのは一八七三年（明治六）だが、このとき生きるための養生学をとなえた伊東重や、外交官として活躍した珍田捨巳も入っていた。

だが、羯南が東奥義塾で学んだのは、わずか一年でこんどは、宮城師範学校（仙台にある）に入学している。一八七四年（明治七）のことである。

なぜ羯南が、師範学校をえらんだのか――そのころ、彼の家には叔父や叔母なども同居する大家族（十五人も）だったため、家計がくるしかったからである。

金のかからない学校――国の金でまかなえる、官費の学校に入ろうとすれば、軍人か教員になる学校しかなかったからだ。

わざわざ、弘前から遠い仙台の師範学校まで出かけたのは、そのころ、まだ青森県に師範学校がなかったためである。

しかし、せっかく師範学校に入学したものの、長つづきはしなかった。

羯南は卒業をまえにして、学校をとびだし、そのまま東京にでた。

さて、東京にでて行った羯南は、司法省法学校に入学したのである。

法学校もまた、金のかからないところだが、とうじ、政府の役人をつくるのを目的とした学校だった。

が、ここでは、賄(まかない)征伐という事件にまきこまれて、羯南は退学をしている。（彼とおなじく退学したなかに、のちの内閣総理大臣になった原敬もいる。）学校をてんてんとかえながら、どこも卒業できずにおわった羯南は、さすがに、あてもなく弘前にもどってきた。

だが、大家族のくるしい生活なので、家にいて、遊んでくらすわけにいかない。

さっそく、青森にあった「青森新聞社」に入った。そのときの肩書きは編集長だった。羯南が、二十三歳のときである。

編集長は新聞をつくる責任者である。

どうして、入社したばかりの若い羯南が、編集長にむかえられたのか？

それは、前にものべたように、そのころの新聞は、自由にものを書くことがむずかしく、とくに、政治や公(おおやけ)のことを論ずると、ざんぼう律という、きまりにふれたものだった。

もし、きまりにふれたとき、責任を負うのが編集長である。

新聞社の、ほんとうの責任者はうしろにかくれ、表むきの責任者として、編集長をおいたわけである。

このように、羯南の編集長も実は形ばかりの物にすぎなかった。

さて、青森新聞社に入った羯南は、県のやり方を、するどく批判した記事をのせた。

さっそく、ざんぼう律にふれて、十円の罰金をうけることになった。これには羯南もいやけがさし、新聞社をやめて、こんどは北海道にわたった。

砂糖をつくる会社に入ることになったからだが、ここも長くはつづかなかった。

血気さかんな羯南は、会社をやめて、ふたたび上京したのである。

彼はここで、はじめて役人生活を経験した。羯南がつとめたのは太政官文書局というところだった。一八八一年（明治十四）、彼が二十五歳のときだった。

上京した羯南は、はじめ山田虎吉という人とフランス語をほんやくするしごとをしていた。が、太政官文書局につとめることになったのは、彼の語学（フランス語）の力がみとめられたからである。

ともかく、それまでの羯南の生活は不安定なものだったが、役人になって、ようやく暮らしもらくになってきた。

彼は下宿ずまいから、下谷に移って一家をかまえ、ここで、一生をおえることになる。

しかし、羯南にとって、役人生活も肌にあわないものだった。文書局づとめも長つづきせず、一八八八年（明治二十一）にやめている。

羯南が、新聞「日本」をつくったのは、翌年のことだった。

羯南が、もっとも力をそそいだのは、新聞「日本」の発行だった。一八八九年（明治二十二）二月十一日の創刊号に、発行の主旨をのせている。

その中の一部分をぬきがきすると、＜わが「日本」は、もとより現今の政党に関係あるに非ず、しかれども亦、商品を以て自ら甘んずるものにもあらず、吾輩の採るところ既に一定の義あり…＞と記してある。

つまり、われわれの新聞「日本」は、とくべつな政党の機関紙でもなければ、一般の新聞のように営利を目的としたものでもない。

そこには、はっきりとした目的がある。

すなわち、その目的というのを、つぎのようにのべている。

㈠、新聞「日本」は、日本の失われた国民精神をとりもどすこと。

㈡、新聞「日本」は、けっして攘夷論をよびおこすものではなく、博愛をもとに、国民精神をたかめること。

㈢、新聞「日本」は対外的には、国民精神をかかげるとともに、国内においては国民の団結をつよめること。

㈣、新聞「日本」は、つねに是非善悪を正し、これをあきらかにすること。

以上のようなものである。

こうして、新聞「日本」がさっそく取りあげたのは、ときの政府に対する痛烈な批判だった。

そのなかから主なものをあげると、＜大臣の出処進退＞＜賄賂論＞＜国政の要義＞＜不逞選人＞＜濁世危言＞＜猟官と漁利＞などがある。

どれも、政府の腐敗をろんじ、国の政治のありかたをのべたものだが、そのため、しばしば新聞は、発行を禁止されたのは、さきにも記したとおりである。

発行禁止は、じつに三十回をかぞえ、年間平均では三回あまりの計算になる。特定な機関紙でも、営利目的でもない「日本」は、あくまで、国民主義を堅持したが、そのために資金の面で、しばしば窮地にたたされた。だが羯南は、さいごまで説をまげなかったのである。

新聞を発行するようになって羯南は、さまざまな人たちとのふれあいも多くなったが、正岡子規と出会うのもこの頃である。

司法省法学校に在学したころ、羯南といっしょにべんきょうした仲間に、加藤恒忠（かとうつねただ）という人がいた。羯南と加藤は親友だった。

子規は、加藤の甥にあたる。

たまたま加藤が、フランスに外遊することになって、羯南に甥のことを頼んでいるが、これが直接子規とまじわるきっかけだった。

とうじ、学生だった子規は、羯南の家の近くに下宿し、しばしば彼の家に遊びにいき、羯南をはじめ、家族の厚いもてなしをうけている。

そのことを子規は『仰臥漫録』という作品（日記）の中にもかいている。

たとえば＜陸（くが）ヨリ自製ノ牡丹餅（ぼたもち）ヲモラフ。此方ヨリハ菓子屋ニ誂（あつら）ヘシ牡丹餅ヲヤル。菓子屋ニ誂ヘルハ宜シカラヌコトナリ。サレド衛生的ニイハバ病人ノ内デ拵（こさ）ヘタルヨリ誂ヘシ方宜シキカ。オ萩クバル彼岸ノ使（つかい）行キ逢ヒヌ＞

とあるが、ゆかいなのは、羯南の家からおはぎをもらいながら、お返しにまた、おはぎをやっていることである。

だが、病気でねている子規は、わざわざ、衛生的な菓子屋のおはぎを買ってとどけているのも、先方（羯南の家）に気をつかっているようすがうかがわれる。

また、『仰臥漫録』の十月五日に、子規は＜衰弱を覚えしが、午後ふと精神激昂、夜に入りて、俄かにはげしく乱叫乱罵（らんきょうらんば）するほどに、頭いよいよくるしく狂せんとして狂するあたわず、ひとりもがきて益々くるしむ。ついに、陸翁に来てもらいしに、精神やや静まる。陸翁、つとめて余をなぐさめ、且つ話す。余も、つとめて話す＞と書いてあるが、子規の心がたかぶって、さけびわめくときにも羯南はやってきて慰め、それによって、心のおちつきをとりもどす、子規のようすがよくわかる。

羯南とまじわった人は数多くあるが、彼らは、羯南という人をどのように見、感じていたのか。

たとえば、明治の洋画家中村不折（なかむらふせつ）という人は、＜羯南は、風格のある人だった。彼と相対していると、まるで泰山にでもむかいあっているような、おかしがたい威厳に打たれた。

羯南は、たしかに謹厳な君子であり、尊敬すべき国士だった。

彼が洋行されたとき、私は、しばらく起居をともにしたことがある。西洋では、夜寝るときかならず靴をドアの外にだすのが習慣だが、生来ずぼらな私は、そんなことには無頓着で、ぬぎすてたまま床にもぐりこむ。

それを羯南が、ちゃんとそろえて、外に出しておいて下さるのには恐縮した＞とのべている。

また、朝日新聞で長いあいだ論陣をはり、新聞会の第一人者といわれた、丸山幹治（まるやまかんじ）は、＞先生（羯南）に、はじめて、お目にかかったとき、その威厳にうたれた。

なによりも、こわかったのはその光る目だった。しかし、話をしてみると、心をなごませるやさしさにあふれていた＜といっている。

佐藤紅緑（さとうこうろく）は、＜先生は、ふだんはあんまり口をいわなかったが、「これは、ものになるかな？」というのがくせだった＞

私が、はじめに羯南先生をたずねたとき、「法律をやります」といったら、「どうかな、ものになるかな？」といわれ、しばらくして「ま

あ、やるがよかろう」といわれた。

こうして私は、法学院へ入学したが、ある事件を起こして学校をやめた。こんどは、法律よりも国学をべんきょうしようと考え、そのことを先生に申しあげたら、また「ものになるかな？」とおっしゃった。それ以上のことはいわなかったが、ある日、とつぜん先生によばれた。

「君のかいた文章がないか？」

と、たずねられたので、中学校の校友会誌にかいたのを、二冊ほど先生にさしだした。

しばらく、先生はそれをごらんになってから顔をあげた。

「よし――。君は、社（新聞「日本」）の方へ、手伝いにきてくれ。」

今日からでもいい。校正をやってもらうが、そのほかにも、何かしごとがあるかもしれないから――という。それをきいて私は、天にのぼるほど嬉しかった。

＜私は、新聞記者になるのだ。

「はい、さっそくまいります。」

とこたえたが、そのときの先生は心のなかで、「これは、ものになるかな？」と思われたにちがいない〉と、紅緑は、新聞「日本」で、はたらくことになったときの感想をのべている。

このように、新聞「日本」を通して、国民主義をつらぬき、反面、後輩たちをあたたかくむかえた陸羯南は、一九〇七年（明治四十）五十一歳でなくなった。墓は、東京染井にある。一方、羯南の出身地弘前にも、彼の偉業をたたえる碑が立っている。羯南を敬慕した故鳴海（なるみ）康仲（やすなか）氏らが中心になって、弘前の街なみを見下ろす、狼森鷲ノ巣にたてたものである。碑文は

名山出名士　此語久相伝　（名山名士を出だす　此語久しく相伝う）

試問巌城下　誰人天下賢　羯南　（試みに問う巌城の下（もと）　誰人か天下の賢）

となっている。

参考文献　相沢文蔵『陸羯南』「郷土の先人を語る(1)」一九六七年（昭和四十二）弘前市立図書館
鳴海病院清明会編『羯南陸実先生』一九五三年（昭和二十八）鳴海病院清明会

出典：弘前人物志編集委員会編『中学生のための弘前人物志平成十五年度版』二〇〇三年（平成十五年）弘前市教育委員会、一一七－一二八頁